

白川郷における煙硝の生産

白川郷の伝統的な主要産業の一つは、硝石という鉱物から火薬の原料となる煙硝（硝酸カリウム）を生産することでした。必要となる技術は、1543年にヨーロッパから火縄銃が伝来してから煙硝生産業が飛躍的に発展した五箇山から伝わりました。村人たちは、家の囲炉裏の近くにある深さ2メートルほどの穴で煙硝を作り、その粗生成物を白川郷に3つあった認可を受けた上煮屋の1つに売っていました。塩硝の結晶への精製はそうした上煮屋で行われました。

上煮屋は、遠くは大阪まで、数々の藩や商人と塩硝の取引を行っていました。最大の取引先は日本海沿岸の有力な加賀藩（現在の富山県、石川県）で、最も多い時には白川郷で生産される塩硝の半分以上を購入していました。加賀藩の当主と独占的に取引を行うことを認められてたある商家は、1788年には当時の白川郷で最大の豪邸を建てられるほどの財力を蓄えていました。チリから安価な代替品が輸入され、地元での生産量が減少する明治時代（1868-1912年）まで塩硝産業が栄えていました。